

いつもありがとう

第9回作文コンクール

入賞作品集

2015

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／崎村忠士／白石収



シナネンって何の会社？

くらしの中で、社会の中で
活躍しています

社会の中で、いろいろ役に立っているんですよ。



「いつもありがとう」作文コンクール共催企業

[シナネングループ]

シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ
ミライフ東日本 日高都市ガス シナネン シナネンサイクル
シナネンゼオミック 品川開発 ミノス



シナネンホールディングス株式会社 東京都港区海岸一丁目4番22号

シナネンHD

検索

第9回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2015) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(氣象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

崎村 忠士(シナネンホールディングス株式会社)

白石 収(朝日小学生新聞)

最優秀賞

おにいちちゃんありがとう 井上 愁稀柊……………4

シナネン賞

ぼくの使命 脇坂 竜丸……………6

ミライフ賞

おばあちゃんの手はまほうの手 天羽 俊輔……………8

朝日小学生新聞賞

ぼくのひでくん 北小路 健仁……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

しろいくつ 久保田 彩煌……………12

「七いちゃん心臓君お母さんは血液さ」 魚瀬 嵩仁……………14

心のバトンパス 有村 緑花……………16

〈高学年の部3編〉

お母さんの代わり 広橋 こはる……………18

ぼくは負けれん 沖野 友哉……………20

ありがとうお姉ちゃん 長島 心愛……………22

団体賞(5団体)

【茨城県】 神栖市立大野原小学校

【愛知県】 扶桑町立柏森小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【大阪府】 大阪市立島屋小学校

【広島県】 福山市立金江小学校

主催…朝日小学生新聞社

共催…シナネングループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三六、一三六作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ「作家」

子どもたちのきらきら輝く「ありがとう」は大人たちへのメッセージだと思います。大人として親としての姿勢を問われている気がします。子どもたちの思いを受け取り損なわないうように、背筋を伸ばして審査に取り組んでいます。ありふれた表現ではなく、独自の表現に心をうたれました。子どもたちの衰えない書く力、人間が好きという姿が見えてうれしかったです。

森田 正光

「氣象予報士」

どの作品も読みごたえがあつて、迷いながら困りながら選びました。コンクールも9回を数え、以前の応募作品とシチュエーションが似るものを見ることもあります。これは「ありがとうには普遍性がある」ということかな、と思います。小学校のときに担任の先生から「感謝の生活は幸福である」という言葉をもらったことがあります。みなさんのように小学校から「ありがとうのある生活」が続いていくことは幸せなことなんです。

小島 奈津子

「フリーアナウンサー」

今回も素晴らしい作品ばかりで、悩みに悩みました。どれも自分が思うままを力強く書いて、心を打たれました。子どもたちのとらえる力、考える力、文章力も

含めた人間としての重みを感じました。今回はお母さんについてのエピソードが多かったように思います。私も小学生の子どもと日々格闘中です。作文を通じて、娘が思っていること、親が思っていることの両方を知り、親子が通る道を体験することができました。

崎村 忠士

「シナネンホールディングス株式会社」

良い作品が増えていくせいでしよう、今年も選ぶのが難しかったです。作文を読むと突然涙があふれて、選考が手につかない日もあつたほどです。各作品を通じて、いろいろな見方、感じ方があることを勉強させてもらっています。そして、読んでいるうちに家族の間の良いつながりが見えてきます。どの子どもにも共通していることは、素晴らしい家族、兄弟、祖父母がいることです。

白石 収

「朝日小学生新聞」

「いつもありがとう」の作文は読んで人を幸せにするエネルギーに満ちています。病気を克服しようとする勇氣、骨折をした祖母への感謝の気持ち、新しいお父さんができたうれしさ、そして、くつや手紙、成長日記に込められている家族のやさしさ…。一人ひとりの作品からエネルギーをもらいました。この幸せのバトンを全国の小学生に手渡していきたいと思います。

(順不同敬称略)

おにいちゃんありがとう

井上 愁稀 柊

ぼくは、こくごさんすうのじゆぎようだけ、「なかよし」というところでべんきょうしています。みんなとは、すこしちがうけどそんなこと、きにしないでいつもやさしくみまもってくれたり、わからないもんだいをおしえてくれたり、ふつうのようにぼくのあいてをしてくれます。そのことがうれしくて、たのしくてまいにちがおもしろいので、わらってばかりいるひがぼくにとってほだいすきです。ときには、けんかをしてばばや、ままにおこられています。ままは、ぼくがふつうじゃないのをきにしているようで、ぼくよりおにいちゃんを、はげしくおこります。おにいちゃんは、「なんでゆきとだけをおこるの。」っていつています。ままは、「あとであきともおこるよ。」っていいいます。おにいちゃんは、すぐ「あきとみたいにしようがいしゃになりたい。」っていいいます。ぼくはしょうがいしゃじゃないとおもうけど、まわりからは、そうみえているんだとかんじてしまいます。そのあと、おにいちゃんは、「あきとごめん。あきとはすきでしようがいになったんじゃないんだよね。だいじょうぶ、どんなことがあっても、ぼくがあきとをまもるよ。」っていつてくれます。そんなことをいつてくれるおにいちゃんは、だれより

もたよりになり、かつこいいおにいちゃんです。でも、おにいちゃんにたよってばかりだけじゃいやです。だから、ぼくは、おにいちゃんみたいになれないけど、すこしでも、おにいちゃんにめいわくや、しんぱいをかけたくないので、がんばって、ままにおこられないようにしていきたい。そして、「おにいちゃんはわるくない。」といえるように、ゆきをだしてままたちにつたえたいです。「おにいちゃんは、ぼくのせいでがまんばかりしているんだよ。」って、まわりにいわれるけど、がまんはしないでほしいです。「こんなぼくは、うまれてこないほうがよかったんだ。」っていつたときがありました。でもおにいちゃんに、「あきとがいるからまいにちがたのしくて、まいにちいっしょにがっこういくのができてうれしんだよ。」「もううまれてこなきゃよかったっていうな。」っていわれました。「うまれてこなきゃよかったってこはだれひとりいないんだ。」そういつたときのおにいちゃんは、ないていました。そのときぼくは、ぼくもいきでいていんだ。ぼくみたいなこでも、ないてくれるひとがいるんだと、おしえてくれました。おにいちゃんのおとうととして、うまれてこれてしあわせです。おにいちゃん、ぼくのおにいちゃんでありがとう。おにいちゃんぼくは、ずっとおにいちゃんのおとうとです。これからもよろしくね。だいすきだよ。ゆきとおにいちゃん。

評価のポイント

客観的に自分や周囲をとらえつつ、素直で前向きな思いを無駄なく書きあげている。

ぼくの使命

脇坂 竜丸

お母さん、ぼくが生まれたとき、どんな気持ちだった？ ぼくが生まれて心臓病だと知ったとき、どんな思いだった？ ぼくは勇気を出して、この作文を書く。誰にも言えない気持ちを打ち明けるのだから。

ぼくは、生まれつきの心臓病。これから話すことは、母に聞いた話である。ぼくは本当は死産で生まれてくるはずだった。生まれた後も、本来なら突然死となっていた。心臓病に気付いたのは、ぼくが生後一ヶ月もしないうちだった。風邪をひき、病院に行ったところ、心臓病が発覚し、大きな病院に移され、まだ小さかったぼくは大手術が出来ず、緊急処置をされた。その処置も六割は亡くなりますと宣告された。ぼくは記憶にないけれど、親せき中、とても大騒ぎだったらしい。

今でも病院には通っている。ずっと順調だったが、前回の検診で、少し悪化していると言われた。母の顔が固まった。ぼくは気付かないふりをした。そのほうが母のためになる。

小さかったぼくは手術が出来なかった。だからぼくが成長して、体力が付いたら大手術をする。ぼくは知っている。その大手術がとても難しく、死んでしまうかもしれないというこ

とを……。でもぼくは、死んだりしない。弟や妹が三人いて、ぼくが助けてあげなきゃいけないから。お母さんは、ぼくが生まれた時から病院通いで大変だったろうと思う。今も小さい弟や妹がいて大変だから、ぼくが守ってあげなきゃいけないんだ。

ぼくは、今、剣道を一生懸命にやっている。今の努力は必ず実になる、と母はよく言っている。今の努力が実になり花となる。手術になる前に必ず花を咲かせてみせる。病気があるからこそ、学校では教えてくれないたくさんのことを学べたんだ。だから、ぼくはぼくのまま、ありのままの姿に感謝する。

お母さん、ぼくは手術で死んだりしないから心配しないで。たくさんの実が、これから花となるんだから。

ぼくは、本当は手術がこわい。不安で胸が張りさけそうになるときもある。けれど、ぼくには使命がある。だから、乗りこえなくてはいけないんだ。ぼくなら出来るんだ、絶対。

お母さん、心臓病のぼくを生んでくれて、本当にありがとう。ぼくは輝く未来に、強く歩み続けます。

評価のポイント

「がんばる」「病気に打ち勝つ」という決意が伝わってくる。思わず応援したくなった。

おばあちゃんの手はまほうの手

天羽 俊輔

「ぼくは、決して、良い子」ではないと思う。家族のみんなは、ぼくの顔を見れば、勉強したの？ ダラダラしていないで早く勉強しちやいなさい。」

と、ぼくが何もしていないと決めつけてくる。そのたびに、ぼくは心の中で、うるさいなあ、だまっててくれないうかなあと思う。いつからか、何を言われても、

「うるさいなあ、だまっててよ。」

と口に出すようになった。いらいらしていると、つい、声も大きくなり、らんぼうな言葉づかいになることもある。もう最近、家族のみんながぼくに何を言おうとしているのかは、ほとんど聞いてなくて、何か言われる前に言い返すようにしている。そんなぼくのことをお母さんが、反こう期と言っているのも知っている。反こう期なんかではないのだ。ふざけるなど思っていた。でもこの夏、いつものように、

「うるさいなあ、だまっててよ。」

と言えなくなった。おばあちゃんが転んで右手をこつ折した。いつも、お母さんが仕事から帰るまで、ぼくのために何でもしてくれたおばあちゃんがその日から何もできなくなった。ぼくのことだけでなく、おばあちゃんは、ごはんを食べることも着がえることも、一人で上手にできなくなった。おばあちゃんは、ぼくを見ると、

「悪いわね、ちよつと、ここおさえてくれる。」

とか、何かぼくにたのむたびに、

「ごめんね。めいわくかけるね。」

と言う。いつもなら、何か言われる前に

「うるさいなあ、だまっててよ。」

と言うぼくの口は、そんなことをおばあちゃんに言えなくなった。悪くなんてないし、めいわくなんかではない。おばあちゃんの右手は今まで、ぼくをむかえるために運転したり、おなかがすいたぼくにおやつを作ってくれたり、キャッチボールだっしてしてくれた。毎日それが当たり前だった。だから、ありがとうなんて言わなくなった。してもらうのは当たり前で、何か言われるのは大きらいだった。でも、おばあちゃんのまほうの右手は、ぼくの、何も言われたくない気持ちをおの夏の間わすれさせてくれた。おばあちゃんを見ると、いたいたしくて助けてあげたくなる。洗い物だってお茶のしたくだった。何でも手伝おうと思った。してもらうことは当たり前なんかではない。ぼくを思うからしてくれる。きつとぼくを思うから、勉強しなさいと言ってくれるのだと思えるようになった。お母さんは

「あなたの反こう期も夏休みね。」

と言う。夏休みではない、永遠の冬みんだと言いつ返したいが、ぐつとがまんしてだまっていた。おばあちゃん、ありがとう。早くよくなつてね。また、キャッチボールしようね。

ぼくのひでくん

北小路 健仁

ぼくには、昨年、新しいお父さんができた。お父さんの名前は、ひでくん。体が大きくて毛がモジャモジャで、少しゴリラにている。ひでくんは、おかしが大好きで、ひでくんの実家に行くと、紙ぶくろいっぱいのおかしをもらって、いつもうれしそうに帰ってくる。大きなおかしも一口で食べちゃうし、沢山入ったおかしを、一度に食べてしまう。まへはママもおねえちゃんもあまりおかしを食べなかつたけれど、今では、みんなテレビを見て、笑いながらおかしを食べている。

今年の夏、ぼくたちは家族四人でキャンプへ行つた。毎年、車いっぱいの荷物を、ママが一人で用意していたので、大変そうだったけれど、今年は、力持ちのひでくんがいてくれて、山ほどの荷物をテトリスのように、きれいに積んでくれた。

海では、いっしょに城をつくった。ぼくより、だれよりも先に、すなを集めてはかためていた。夜は、キャンプ場にもどり、バーベキューをして、花火をした。ぼくは、両手に一本ずつしか花火を持ったことがなかつたのに、ひでくんは両手に五本もって、うれしそうにふり回していた。地面に置いて火をつける花火は、ママが怖いと言ってやったことがなかつたけれど、今年はひでくんが、真剣に説明を読み、ぼくたちを少しはなれた所にまた

せ、火をつけてくれた。ぼくの背より高く火が上がり、迫力があつてきれいだった。

一人プールにも行つた。黄色と青の長いウォータースライダーがあり、ぼくは初めて挑戦したが、待つ場所が高くて怖いので、一度すべって、下で見ていた。すると、おねえちゃんが笑いながらすべってきて、次にママが、「キヤー」と叫び笑いながら下りてきた。その時、まわりの人が上を見て、「うおー」とさわぐので、上を見てみたら、恐ろしい速度で、とても大きなかけがすべり落ち、バシヤーンとすごい音がして、水しぶきがみんなにかかった。・・・ひでくんだった。その日ひでくんは、十三回すべった。すごかった。

カギがこわれて、ずっと使えなかつたぼくの自転車を、いともかんたんに直してくれただひでくん。上手に乗れないぼくの自転車の後ろをおさえてくれて、なんども練習したら、やっと一人で乗れるようになった。ぼくもひでくんも、汗がびっしょりだった。

ひでくんは、いつも優しく、おっとりしていて、おもしろい。ぼくが間違つても、しずかに話して教えてくれる。ぼくのゲームや好きなアニメの話を、とことん聞いてくれる。ぼくのそばにはいつもひでくんがいる。まだ「お父さん」とよんだことはないけれどひでくんは、ぼくの最高で世界一のお父さんだ。

ひでくんいつもありがとう。

お父さんになってくれて、本当にありがとう。

評価のポイント

ひでくんの人柄の魅力や、言葉ではなく行動で家族を幸せにしようとする様子が感じられる作品。

しろいくつ

久保田 彩煌

「ねえ、さきちゃん。くろいくつにしてくれない。」
と、おかあさんがいました。

わたしは、入は入りするとき、白しろいくつをかってもらいました。だけど、白しろいくつは、一日いちにちはただけで、よこれがわかってしまいます。うんどうかいの、れんしゅうがまい日ひあるので、まっくろになつてしまいます。一年生いっねんせいで、白しろいくつは、わたし一人ひとりです。

でも、わたしは白しろいくつが、だいすきです。なぜかという、あさ学校がっこうへいくとき、白しろいくつがきらきらひかっているのを見るのがだいすきだからです。はいているときもちがいいです。

それと、あさ、おかあさんとはなれるのはさみしいけれど、あらつてもらった白しろいくつをみると、おかあさんがついているとおもえて、ゆうきがでます。

「白しろいくつがすきなんよ。白しろいくつがいいんよ。」
と、わたしはへんじをしました。

おかあさんは、いきをはきながら

「ふうん。」

とだけ、いいました。

「あつ。」

月げつようび学校がっこうへいこうとおもつてくつをはこうとすると、あらつてまっ白しろになつたくつが、げんかんにおいてあるのにきがつきました。わたしは、おかあさんのほうをむいて、

「ありがとう。」

と、いって学校がっこうへいきました。

学校がっこうからかえつてくると、げんかんに、もう一足いっすく、あたらしい白しろいくつが、おいてありました。わたしは、そのくつを、みながら

「ただいま。」

という、おかあさんが、

「おかえり。白しろいくつ、もう一足いっすくかっちゃった。一つひとつ大きいサイズなんだけどね。

けさ、さきちゃんが、しぜんと心こころから、『ありがとう。』って、いつてくれたからおかあさんが、ぼつてくつあらうわ。」

と、すぐえがおでした。ちよつとびつくりしたけど、わたしもえがおになりました。

おかあさん、はいていてきもちいいよ。

ありがとう。

『おじいちゃんは心臓君、お母さんは血液さん』

魚瀬 嵩仁

僕は最近考えた。「僕の体の中はどんなになっているんだろう」「僕はだれのおかげで毎日生きていられるんだろう」、そして僕は考えついた。「体の中のみんな」のおかげだということに。僕はその中でも心臓と血液が一番大切だと思った。なぜなら、お母さんのおなかの中にいる時から今まで、僕が生きてきた間ずっと一秒も休まずに働き続けてくれているからだ。

心臓は一分間に六十回から七十回拍動している。僕は計算してみたくなった。僕は子供だから一分間に七十回で計算してみた。一時間で四千二百回、一日で十万八百回、一ヶ月で三百六万六千回、一年で三千六百七十九万二千回。もうすぐ僕は九歳になるから、おなかの中にいた十ヶ月分を合わせてみると、今までだけでも、三億六千七百七十八万八千回も心臓は僕のために働き続けてくれていることになる。

血液は体に必要な酸素や養分を全身に運んで、二酸化炭素やアンモニアなどの不要物をとかして運んでいる。まるで、宅急便屋さんが荷物を届けてくれて、ゴミ収集車がゴミを回収してくれるような仕組みだ。なるほど、血液も休まずに働き続けてくれているんだ。

僕の家族は三人家族。おじいちゃんは、心臓君。家族のために毎日仕事をがんばってくれている。毎朝六時に起きて、電車に乗って仕事に行く。休みの日は庭の草むしりもしてくれている。夜、新聞の切り抜きをやっている面白記事があったら僕に教えてくれたりする。もう七十二歳だけど、おじいちゃんは僕の家の大動脈だ。

お母さんは、血液さん。赤血球は酸素を運ぶ—お母さんは毎日おいしいご飯を作ってくれる。白血球は細菌をやっつける—お母さんはあふないことから僕を守ってくれる。血小板は血液を固めて出血を止める—僕が病気やけがをした時にすぐにとんできて手当てをしてくれる。血しょうは二酸化炭素・栄養分・不要物をとかして運ぶ—お母さんは僕がいけないことをした時はおこってくれて、よいことをした時はたくさんほめてくれる。僕のために毎日一生けんめいのお母さん、大好きだよ。

心臓も血液もおじいちゃんもお母さんも、いつも僕のために働いて、僕を守ってくれてありがとう。僕はもともと自分を大切にしたいくなりました。これからもがんばります。いつか僕が心臓君になるからね、楽しみにまっていますね。

心のバトンパス

有村 緑花

私のお父さんとお母さんはいつも仕事でいそがしいので、おばあちゃんがお世話をしてくれます。

私とお兄ちゃんは、いつもけんかしてばかりです。物もちらかしてばかりです。それも全部おばあちゃんが止めたりかたづけたりしてくれれます。

そんなおばあちゃんの気持ちも少しは考えようと思って、夏休みはけんかもしないようにして、ちらかした物もかたづけるようにしました。

おばあちゃんが、

「緑花ちゃん、どうしたの。」

と、おどろいています。

「かたづけてるの。」

と返事をしました。

「あら、そうなの。ありがとう。」

おばあちゃんは、こう言ってくれました。そのありがとうのえ顔に、私もうれしくなりました。

このことが、私の「ありがとう」について考えるきっかけになりました。そして、思いついたのです。ありがとうって、「心のバトンパス」なんじゃないかって。

そう考えると、おばあちゃんからお礼を言われた私は、おばあちゃんから心のバトンを手わたされたことになりました。

バトンはリレーの時に使います。うけとつたら次の人にひっしにつなぎます。「だから私も次の人にバトンをパスしないとイケないな。」と思うようになりました。そして、こういうことをくり返すと、みんながえ顔になれるんじゃないかと思いました。

ために私はお兄ちゃんの分までかたづけてあげました。するとお兄ちゃんの方から、「おう、ありがとうな。」

とお礼を言われたのです。びっくりしました。人の分までかたづけるのは本当はめんどろで大へんに思うけど、またバトンパスをもらうとわるい気持ちにはなりません。自ぜんと私の顔は、え顔になっていました。お兄ちゃんの顔もです。

私は、いつも当たり前のように心のバトンパスをしてくれるおばあちゃんが大すきです。そして私もこんな風に相手をえ顔にできる人になりたいなと思いました。

あなたも「心のバトンパス」をもらうかもしれないよ。そしたら、あなたもちゃんと次の人にパスしてあげてくださいね。

お母さんの代わり

広橋 こはる

「お願いしたい事があるの。お母さんのお仕事、覚えてくれるかな。」

夏が近づくころ、母の体調が悪くなり、しばらく入院をして手術をする事が決まった。私は生まれて10年間、母とずっと一緒だった。妹が生まれた時でも、母は4才だった私にさみしい思いをさせたくないと自宅での出産を選んでくれたぐらい、私は母のそばにずっといた。私も妹も、母がいない夜を過ごした事が無かった。

たくさんの不安はあったけれど、私が母の代わりにできる事を教わった。今までも手伝いをする事はあったが全て一人でやるとなると分からない事が多かった。洗たく物にしても、洗い方や干し方、服をたたみ、タンスにしまうまでけっこう大変だった。お料理もやけどを何度もして、いやになった。今まで楽しかったのは、一緒にそばで見られる母がいたからだと気がついた。

夏が来て、入院の日が近づいた。洗たくも料理もそうじも覚えた私に母はこれで安心して夏が来て、入院の日が近づいた。母が私と妹の前で動けなくなってしまった。まだ父も帰宅していない。次の日の事だった。母が私と妹の前で動けなくなってしまった。まだ父も帰宅していない。時間、いたみをこらえながら母は私に病院に電話をして、おとなりの人を呼んでほしいと頼んだ。母はその夜のうちに緊急手術となってしまった。全身麻酔という薬で目の開かない母を見て、妹はずっと父にだかれて泣いていた。私は泣きやまない妹の横でただ立っていた。

手術が終わり、たくさんの管をつけられた母を置いて父と妹と家へ帰らなければならず、想像をしていたよりもつらい気持ちでいっぱいだった。眠れないまま朝がきた。母のいない家、どこか静かな空気が流れる。面会に行けるまで私は母から頼まれた仕事を、もくもくと始めた。早く母が元気になって帰ってこれるように、私が代わりに頑張ると決めたから。

今まで、母にしてもらっていた全てを感謝できた経験だった。

入院中、母が私に手紙を書いてくれました。私がいってくれて本当に助かったよ。ありがとうと書いてありました。私こそありがとう。

母の戻った家には明るい笑い声がひびいています。

ぼくは負けれん

沖野 友哉

準決勝までできた。あと二つ試合に勝てば、優勝できる。相手がぼくをにらんでくる。でも、今のぼくは目をそらさない。竹刀をぎゅつとにぎりしめた。(ぼくは負けれん)心の中でさげんだ。剣道を始めるまでのぼくは弱虫だった。

三才上の兄は私立の学校に通っている。家から遠い学校へは、母が送り迎えをしている。朝は早いし、帰りはおそい。その上、土曜日も学校がある。宿題がいっぱいで、テストばかり。いい成績をとるためにじゅくへも通う。勉強、勉強、勉強がおいかけてくる。それがいやで、ぼくは家に近い公立の学校を選んだ。一つ下の妹は、兄と同じ私立の学校を選んだ。

母はいそがしくなった。

「友哉、おきなよ。」

その声の数分後、車のエンジンの音がきこえる。エンジンの音より大きな母のどなり声。

「忘れ物ないで。」「早うしなさい。」「もう、何をしよん。」「

兄たちをおこりながら、学校へ送って行く。

夜おそくなつて、母がくたくたになつて帰ってくる。ぼくの顔をみるなり、

「友哉、宿題したん。」「

ぼくは知らん顔をする。(それより先に「ただいま」とちがうん。「おかえり」もいえん。)

毎日がこんなくり返し。ぼくの心の中のトゲトゲがどんどん大きくなっていく。

あの日、ぼくの心がひめいをあげた。

ゲームをして遊んでいるぼくに、祖母が、

「友哉、宿題したん。お母さんが帰る前にしとかなあかんよ。」「

いつもいわれている事なのに、どうしても腹が立って、自分がおさえられなかった。

「うるさいわ。ばばあ。」「

一番の味方のばあちゃんにひどい言葉をぶつけた。祖母の方をむくことができない。(ぼくの居場所がなくなった。)悲しかった。

だけど、それはちがっていた。祖母はぼくの心のひめいをしっかりと受けとめてくれた。そうして、ぼくは剣道と出会った。

練習試合に勝っただけで大喜びする母。その話をうれしそうに聞いている父。祖父はうっすら涙をうかべている。

「友哉、すごいなあ。がんばったなあ。」「

と応えんしてくれる兄と妹。ぼくの大切な家族。ぼくも、この家族の中にいるんだ。

今までぼくは、いろんなことから逃げだした。都合の悪い事は、だれかのせいにもした。だけど、もう逃げん。ぼくは戦う。(もっともっと、強くなりたいたい)そう思った。

この大会が終わったら、心配をかけた祖母と母に、謝ろうと決めている。応えんしてくれる大切な家族に「ありがとう」と言おう。

あと二試合、ぼくは全力で戦う。

ありがとうお姉ちゃん

長島 心愛

「こうちゃん。」と大きな声で私を呼ぶ回数が少ないのは、毎日私のすぐそばにいたからだね。今だから言えるたくさんのありがとう、お姉ちゃんの妹になって良かった。

私には、十二才はなれたお姉ちゃんが一人います。お母さんに聞いた話ですが、十二年間、ずっと「妹が欲しい」と数えきれないほど言っていたそうです。

検しんの時に初めて私の心臓の音を聞いたお姉ちゃんは、感動して泣いてしまい、その日から成長日記を書いていたそうです。

たん生日には、毎年、最高の笑顔でおいわいしてくれました。今年で十一枚目になったメッセージカードには「こうちゃんお姉ちゃんの妹に生まれてきてくれてありがとう。命は一つだから大切にまた一年元気にすごしてね」と書いてありました。今私は私が生まれた時のお姉ちゃんと同じ六年生になりました。

私が生まれる前から、お姉ちゃんは、いつか生まれる妹へと、ダンボール箱に書き、使わず大切にとっておいた私にあげたい物を残してくれていました。そのダンボールを一年生の入学式前に開けました。中には、ぬいぐるみ、ぬり絵、折り紙、キーホルダー、レ

ターセット、メモ帳、ビーズ、アクセサリや、小学校で使える物がたくさんありました。私の知らないキャラクターもあり「何これ見た事ないよ。」「お姉ちゃんの時代はこれが人気だったの。」と笑いながら開けたのをおぼえています。私が生まれる前から私の事を思い長い間待っていてくれたお姉ちゃんの優しい気持ちがいっぱいまったダンボール箱でした。

私の周りの友達、兄弟の年が近くて一緒に学校に通っていてとてもうらやましく思っていました。一緒に学校には通えないからと授業参観は、仕事のシフトを変えてかならず来てくれました。運動会では、私はずかしくなるぐらい誰よりも大きな声で毎年応援してくれました。低学年の持久走大会では、走るのが苦手なのにと中から私の横を息を切らしながら走ってくれました。私の成長をいつも近くで見てくださいました。

でも、そんなお姉ちゃんと後一年しか一緒に暮らせません。来年の8月には、結婚して家を出てしまうからです。さみしい気持ちで今は、いっぱいだけけど、たった一人の大好きなお姉ちゃんだから、世界一幸せになつてほしい。私が生まれる前から私を長い間待っていてくれて、年がはなれているから一緒に過ごす時間が短かいからと、いつも私を優先にそばにいてかわいがってくれたお姉ちゃん本当に、ありがとう。いつかお姉ちゃんの赤ちゃんが生まれたら、お姉ちゃんが私にしてくれた事を、私もしてあげたいです。